

「これからの20年」から10年が経過して

RIST企画委員
熊本大学 准教授
伊賀崎 伴彦



私は、RIST元会長の村山伸樹先生に師事したということもあり、月例フォーラムでの聴講を中心に、修士課程の学生のころからRISTのイベントに顔を出しておりました。博士課程を終え、本学に奉職してからは、「テクノサイエンスキッズ」という企画では夏休みに小中学生や保護者を対象とした研究紹介や科学教室を、「イブニングスクール」ではデスクトップPCを組み立ててLinuxサーバーを構築するという企画をお手伝いいたしました。10年ほど前からは企画委員としてRISTの末席を汚しているところですが、こうやって振り返ると、およそ四半世紀に亘って何らかの形でRISTのお世話になっていることとなります。個人的にRISTに感謝していることとして、恥ずかしながら学生時代は「欠食学生」でしたので、図々しくもフォーラム後の交流会までご一緒させていただき、周囲のみなさんから「食べ、飲み」と可愛がっていただいたことがあります。また、イブニングスクールにご参加いただいたある方とはまったく別の場面で再会し、それ以降、世代を超えて仲良くしていただいています。

ところで、私がRISTの記念誌に登場するのは20周年に引き続き二度目となります。そのときは、産官学それぞれの立場から20～30代の若手8名が「これからの20年の自分やRISTに対する抱負を語る」という座談会でした。起こされた文章を読み返しますと、私は「これだけITが進歩しても、実際に人と人が出会って、少しでもいいから顔と顔を

突き合わせて情報交換する場が必要」「学のシーズを産に投げかけ、官のバックアップをいただきながら熊本のものづくりの種を作りたい」「RISTは寄り合いのような役割もあるので、技術だけにこだわるのではなく、『困ったらRISTに行こう』場所になれば」というような発言をしていました。それから10年が経過し、そのときに私が話した内容のどれほどが自己実現できたのか、RISTに貢献できたのかと問われると、答えに窮してしまうのが正直なところではあります。とりわけ、私自身がどうあがいても若手とは呼ばれない年齢となったにも拘らず、今の20～30代の（本学）教員をRISTに取り込めていないのではないかと考えると、少なからず責任を痛感するところがあります。

30年前、産官学連携は非常に珍しかったと聞きます。だからこそ、RISTの設立意義は大きかったのだと思います。しかし、この30年で産官学連携を取り巻く環境は随分と変化し、中でも工学系の「学」は「産」「官」と連携するのが当然のような雰囲気さえ感じます。一方で、世界はグローバル化、高度情報化され、本邦は少子高齢化による労働者不足に悩まされています。これらは、30年前には少なくとも眼前の問題ではなかったと思います。ならば、その問題に対して、特に技術的な面で産官学が連携して取り組める場所の一つとして、これからの10年のRISTがあってもいいのではいかと考える次第です。